

# 2019年2月 パタゴニア・フィッツロイ山群における 事故および救助活動についての報告

横山 勝 丘 (信州大学学士山岳会)

## 1. はじめに

事故から一年。事故の瞬間の光景はいまだに私の脳裏にこびりついており、思い出すたびに戦慄が走る。

本来であれば、できる限り早いうちに事故報告書を作成すべきであったのだが、私自身の怠慢と、未だに事故そのものを消化しきれていないこともあり、なかなか踏ん切りがつかないままだった。そんな折にこの原稿の依頼があった。当初はあまり乗り気ではなかったが、この機を逃せばこの先今回の事故を振り返る機会は失われるという思いもあり、引き受けさせていただくことにした。簡単ではあるが、事故そして救助の概要をここに記す。

## 2. 行動概要

2019/1/3 成田より出国。

1/5～1/29 ベースとなるエル・チャルテン近隣の山で登山活動、レスト、準備等。

1/30 フィッツロイ山群全山縦走（フィッツトラバース）を目指して入山。

1/31 フィッツトラバース1日目。

2/1 フィッツトラバース2日目。3座目となるアグハ・ラファエルファレスに登頂後、懸垂下降中に事故発生して佐藤が墜落。横山が佐藤と合流後、ビバーク。

2/2 横山が単独で山を下り、救助要請。2チームが佐藤に合流し一緒にビバーク。

横山は現地ガイドを中心とした救助活動チームと合流後、ポラコキャンプでビバーク。

2/3 終日搬送活動。

2/4 夜通しの搬送活動の末、氷河上でヘリコプターにピックアップされ、佐藤はカラファテの病院に直行し入院。横山はエル・チャルテンまで下山。

2/5 横山、夕刻カラファテに移動、病院へ。カラファテ滞在開始。

2/6～3/1 佐藤は継続して入院。横山はカラファテに滞在しながら雑務。佐藤、2/26に退院。

3/2 横山、カラファテを離れる。3/4帰国。

3/9 佐藤、カラファテを離れる。3/11帰国。

## 3. 事故の経緯と解説（図1）

事故の起きた2月1日は、私たちのフィッツトラバース挑戦二日目、入山日も含めると三日目であっ

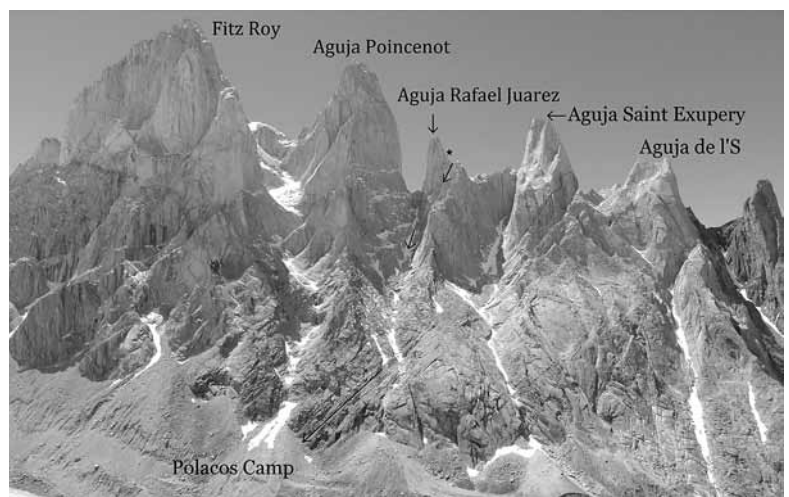


図1：フィッツロイ山群南5座。★が事故現場。矢印に沿って救助活動が行われた。

### 3. 海外登山記録

た。晴天ではあったが終日風の強い天候で、稜線上の雪も多かった。この日周囲に他のクライマーの気配もなく、稜線上は私たちのチームのみだったと思われる。ただ、翌日からの晴天周期到来に備えて多くのクライマーが氷河上のベースキャンプまで入山していたようだ。

朝のうちに二座目となるアグハ・サンテグジュペリに登頂するが、その後強風のために3時間以上の間、稜線上で待機を余儀なくされる。15時30分過ぎに行動を再開、その3時間後の18時30分には3座目となるアグハ・ラファエルファレスに南面のアングロアメリカルトから登頂する。山頂からの下降は同ルートに取り、稜線のコルから西面に下る予定であったため、登攀で使用する60メートルシングルロープ一本(※1)とクライミングギア以外のすべての装備をコルに残置しての登頂であった。ここまでで、この日の行動時間は5時間ほど。(図2)

[以後、時系列で記す]



図2：事故現場概念。

18:45 懸垂下降開始。私たちは手持ちの60メートルシングルロープ一本で同時懸垂下降(※2)を行なった。したがって、一回で下降できる距離は30メートルである。

19:15 五度目の同時懸垂下降。横山が先行する。ロー

プの残りが3メートルほどになったところで外傾したテラスに到着。このとき、ロープの末端にはすっぽ抜け防止の結び目を作っておらず(※3)、残りのロープが少ないことも認識していた。上にいる佐藤からも注意喚起がある。私の目の高さ、クライマーズレフト側に佐藤が登山靴を残置したアンカーが見える。少しずつそのアンカーに向けてロープを出しながら近づいてゆく。

私がアンカーの脇に立った時点で、ロープの末端は残り1メートル弱。私の使用していた下降器はブラックダイヤモンドのATCパイロット(※4)で、完璧にはないにせよ制動サポート機能がある。そのため、全行程を通して懸垂下降時にバックアップも取っていなかった。これは、セッティングの手間の軽減と時間短縮が目的である。この時、末端は結んでいなかったため制動手の左手はしっかりロープを握っていた。

右手でランヤードをハーネスから外し、アンカーにクリップしようとしたその瞬間、「シュルツ」という音とともに私の側のロープ末端が、下降器を瞬時にすり抜けていった。私はバランスを崩したが、とっさにアンカーを右手で掴み事なきを得た。私のすぐ右で「ドサツ」という鈍い音。振り返ると、佐藤の身体が岩盤を跳ね、落下してゆくのが見えた。2・3秒斜面を転がり落ち、次の瞬間には視界から消えた。19:20 佐藤に向かって何度も叫んで呼びかけるが、返事はない。彼が消えた方向の50メートル先は傾斜が強くなっており、今私がいる場所からだ、その先は断崖絶壁になっているようにも思われた。

私のデバイスから抜けたロープは、最終的に佐藤のデバイスからも抜けたようで、私のいるアンカーの右15メートルほどの空中を揺れている。慎重にロープ末端まで外傾バンドをトラバースする。ロープを引っ張ってみるが、ピクリともしない。どうやらも

う一方の末端が稜線の東側のどこかに引っかかってしまっているようだ。仕方なくロープはその場所に残し、アンカーまで戻る。

ここから荷物を残置したコルまでは、5.5程度の易しい岩稜帯である。まずは自分自身の安全の確保が最優先事項と決め、荷物を残置したコルまで慎重にダウンクライミングすることに決める。

19:40 アンカーに残してあった佐藤の登山靴を回収し、下降を開始する。チムニー状の岩稜をダウンクライミングしてゆく。

19:45 しばらく下ってゆくと、奇妙な音が聞こえた。それが人の呻き声だと気付くのに少し時間がかかった。

19:50 佐藤は外傾した3畳ほどの広さのテラスで仰向けに倒れていた。呼び掛けには応じず、呻き声だけを発していた。すぐに手持ちのカムでアンカーを作り、佐藤のランヤードをクリップして安全を確保した。

以上が、事故当日の行動ならびに事故の概要である。

(※1) このとき稜線は風速15m/s 近い強風が吹いており、懸垂下降はピッチを短く切つて行なう必要があった。さもなくば、ロープはいたるところで岩角に引っかかっていただろう。相談の結果、登攀時の軽量化とスピードアップを図るためにロープは一本のみを持参し、時間と回数はかかっても懸垂下降は30メートルでピッチを切り、ロープ回収に手間取るリスクを軽減させることにした。

(※2) 本登攀中は、常時同時懸垂下降を採用していた。アンカーに通したロープの両側にぶら下がったお互いの体重をアンカーとして下降する方法であり、下降に要する時間は劇的に軽減される。これには多少の習熟が必要となる。お互いの意思疎通が必要なのは言うまでもないし、様々なリスクも増える。しかし時間短縮というメリットは、そのリスクを差し引

いてもスピード重視の縦走では大きい。

(※3) これが今回の事故の直接的な原因であり、基本中の基本を見誤った最大のミスと言わざるを得ない。

私はかつてロープすっぽ抜けを経験しており、それ以来結び目は作るように心がけていたのだが、それは様々な状況下でフレキシブルに変わるのも事実だ。

佐藤は、スピードと手間、さらには様々なリスクなどを考慮し、基本的に結び目は作りたがらない。

この時の周囲の風は前述したとおりだが、ロープ末端の結び目が引っかかるリスクを恐れ、私たちは結び目を作らずに下降を続けていた。ただ、下降しながらロープ末端とアンカーの位置関係には常に気を配っており、少しでも不安要素があれば、その都度必ず懸垂下降中に結び目を作り直す対策は講じていた。この直前の懸垂下降でも、私は途中で末端に結び目を作り直していた。なぜ事故の時だけ末端に結び目を作り直さなかったのか、我が事ながら理解に苦しむ。

私自身がいた場所がすでにテラスだったため、ロープコントロールは比較的容易い状況であった。また、そこより下は傾斜も緩く、高度感による緊張は軽減される。その安心感と、私が先にアンカーにクリップさえしてしまえば、後はこちらで佐藤の下降のコントロールも可能であるとの判断がちょっとした焦りを生み、深く考えることもせずに安易な判断をしてしまったのだろう。返す返すも、結び目さえ作っておけばと後悔してしまうが、まさかしっかり握っているはずのロープがすっぽ抜けるなんて！という驚きの方が、その瞬間は大きかった。

(※4) 今回の事故に関しては完全に私自身の責任であり、この場で市販のブレイデバイスにケチをつけるつもりは毛頭ないが、同製品、ならびに他メーカーの同様の製品を使用している人に向けての注意が必要と思われるので、ここに記す(図3)。



### 3. 海外登山記録

図にもあるように、ATCパイロットはデバイスの角度を変えることによってカラビナとのジャミング効果を得てロープの流れを止める構造となっている。

当然その角度が変われば、制動力も変わる。

ATCパイロットの場合、ほんの少しのギアや体の干渉によって、その角度が変わってしまう傾向がある。また、今回のようなロープ一本での懸垂下降時には余程の太いロープでない限り、手を離せばズルズルとロープが出ていってしまう程度の制動力である。

話を今回の事故に戻せば、先述のように、私の意識としてはかなり強くロープを握っていたつもりであった。にもかかわらず、ロープ末端は全くコントロール不能であるかのごとく私の手からすり抜けた。原因の一つには、ロープ末端ギリギリの状態が無理にランヤードをアンカーにクリップしようとした際、ロープに必要な以上のテンションがかかったことが考えられる。過度なロープの伸びが反動となり、ロープに急激な縮む力が加わったような感覚である。また、ギアや体などがATCパイロットに干渉して図3の②の方向に動き、制動を解除してしまった可能性も考えられる。デバイスとカラビナを組み合わせる制動する類のブレイクデバイスには常に同様のリスクがあり、また制動そのものの能力は概して弱く、カラビナとの相性次第では制動は効きにくくなることも覚えておくべきである。

同時懸垂下降自体は一般的ではないが、それこそシ



図3：ATCパイロットでの制動（ロストアローHPより）。①の方向にサムレバーを引き上げてロープをリリースする。また、何らかの力が②の方向に加わると、ロープは簡単にリリースされてしまう。

ングルピッチのルートでクライマーをローダウンする場合も、システムとしては同じ状況だ。ということは、グラウンドフォールを含めた同様の事故が起こる可能性を示唆している。レバーを上下させて制動力を変えるシステムも、微妙なコントロールには習熟が必要だ。それらのリスクを理解し、練習を重ねたうえで適切な使用をする必要がある。

### 4. 事故後の対応

20:00 佐藤を発見し、生存していることを確認したが、転落の状況や彼自身の様子から判断するに、事態は深刻であった。簡易的な止血作業ののち、佐藤を残し、ロープスケールにして100メートル下のコルに残した荷物を回収しに行く。

21:00 全荷物を持って佐藤のいるテラスに戻り、ビバーク態勢に入る。

夜半の佐藤の様子は、一進一退であった。何度か持参していた鎮痛剤を無理やり飲ませようとするが、その度に吐き出してしまふ。また、嘔吐を何度も繰り返す。時間が経つにつれて、言葉にならないほどの声で何かを呟けるようになるが、会話は一切成立しない。明け方、佐藤がいきなりムクリと起き上がり、ハーネスを脱ぎ始めた。どうやら尿意を催したようで、中腰になって小用を足しはじめた。これにはいささか驚かされた。元気なのかと思ったが、小用が終わるとすぐにその場に倒れ込み、呻き声を上げる。とりあえず無理やり再度ハーネスを履かせて安全を確保した。

夜が明けてからの行動を頭の中で整理する。佐藤の状況からして、自力で動けないのは明らか。私が彼のサポートをしても、何も動けないような状況であった。翌日からの晴天を考えれば、少なからぬクライマーが早朝から行動を開始することは想像ができた。私たちのいるアグハ・ラファエルファレスのアングロ

アメリカルートも人気ルートの一つであるため、誰かが登ってくる可能性は十分に考えられた。もし彼らが合流して一緒に救助活動ができるのならベターである。もう一つのアイデアは、ヘリコプターによるピックアップであった。しかし、フィッツロイ山群周辺にはヘリコプターそのものが無いはずであった。これは数年前にローカルのローランド・ガリボッティから聞いていたことだった。彼曰く、「フィッツロイ山群での救助活動は基本的に人力だ。ヘリコプターはない。ブエノスアイレスの方まで行けば、あるにはある。ただその場合、救助には何万ドルも費用が掛かる。」

しかし、その額を払ってでもヘリコプターによる救助が可能なのであればそれに勝る方法はないと感じていた。また、もしかしたらその話を聞いてから現在までの間に、この山域にもヘリコプターが配備されているかもしれない、という期待は捨てきれなかった。

2月2日 無風快晴

7:30 周囲が明るくなったのを見計らい、テラスから1ピッチ分ダウクライミングしてトーレ谷方面を確認しにゆく。一筋のトレースを雪渓に見つけたが、別の方向に続いている。その下の雪渓を誰かが登ってくる様子もない。誰かと合流して救助活動に入れるかもしれないという淡い期待はここで潰えた。私が一人山を下り、誰かの助けを求めるのが唯一の方法であった。

8:00 佐藤の元まで戻ると、佐藤は再びハーネスを脱いでいた。無理やり履かせようとするが、それを頑なに拒む。見た目はほとんど瀕死の状態なのに、どうしてこんな力が出るのか不思議であった。ハーネスを履かせることは断念し、彼を包んでいるツェルトそのものをアンカーに固定した。

9:15 できる限りの装備を残し、私はギアとロープ1本、最低限の食糧、防寒着、ヘッドランプだけを

持って下降の態勢に入る。コルまでの100メートルはダウクライミング。コルからは30メートルの懸垂下降を繰り返す。途中、聞き慣れた日本語が聞こえた。同時期に入山しているはずの増本亮・さやか夫妻の声であるのは明らかだった。一度大声でコールするが、返事はない。

10:45 何か所かで小さなトラブルはあったが、無事に雪渓までたどり着いた。すぐに雪渓の下降を始める。

11:00 下降を始めて数分後、再び増本夫妻の声。声のしたアグハ・ポワンスノの方向を見上げると、彼らが壁を登っているのが見えた。大声で話しかけると、向こうも気がついた。端的に、事故の旨、救助が必要な旨を伝えると、彼らはすぐに下降の準備を始めた。

12:00 増本夫妻と合流。彼らに事の詳細を伝え、救助に合流してもらうことになった。すぐに佐藤の元に向かってほしい旨を伝えると、彼らは快諾してくれた。

[以下、増本夫妻の行動]

13:40 アングロアメリカルート登攀開始。

20:15 佐藤の元に到着。

増本夫妻が佐藤の元に到着したとき、佐藤はツェルトを這い出して外傾したテラスの上に仰向けで横たわっていた。朝、私が佐藤の元を離れる時にはまだ寒く、ありったけの防寒着を着せていたのだが、昼になるにつれて気温が上昇し、暑さに耐えかねてツェルトから這い出したものと思われる。容態は変わらず深刻だったが、問いかけには僅かに応



図4：寝袋をアンカーに繋いで吊るす。佐藤はこの場所で二晩ビバークした。

### 3. 海外登山記録

じる。ハーネスを履かせることは不可能で、佐藤を寝袋に入れて、その寝袋ごとアンカーから吊るして一晩その状態を維持した(図4)。

[以下、横山の行動]

12:30 私は引き続き救助要請のために山を下る。増本夫妻と別れて5分も経たないうちに、下から登ってくるアメリカの二人チームに出会う。私の憔悴した様子に気づいたようで、彼らの方から心配して声をかけてきた。事故の説明、すでに増本夫妻が現場に向かっている旨、ヘリコプターによる救助が最善ではないかとの考えを伝える。通信機器を貸してほしいと伝えたが、あいにく彼らは持ち合わせてはいなかった。彼らはしきりに救助を必要としているか聞いてきたが、この時点ですでに、私はヘリコプターによる救助が唯一の方法であると思い込んでおり、また、これ以上他のクライマーたちを巻き込みたくないという思いもあって、申し入れを断った。

12:45 別のアメリカ人パーティとすれ違う。彼らがテキストを送れる通信機器を持っていたので、事情を説明し、公園事務所に一報を入れてもらう。

14:30 氷河に降り立ち、街に向けて歩いていると、現地のガイド達四名とすれ違う(彼らはプライベートで山に入っていた)。彼らに事情を説明し、会話をすす中でようやく、この山域には”やはり”ヘリコプターが無いこと、救助活動は自力でのみ可能であることを完全に理解する。彼らはすぐさま国立公園事務所に電話を入れ、救助活動の準備を進めてくれた。救助活動は翌朝からとし、それまでに人員と物資を調達することに決まった。

救助の方針は以下の通り。

☆佐藤を壁から降ろす作業(以下、セクション1)は、増本夫妻を中心に行なってもらう。彼らへの伝令ならびにサポートを、近くにいる誰かにお願いする。ちょうどタイミング良く他のアメリカ人二人組

がすれ違ったので事情を説明すると、翌日早朝からアングロアメリカルートを登って合流してもらうことになった。

☆私とガイド4名は、ルート取り付きから氷河までの雪渓ならびにスラブ帯の下降(以下、セクション2)を担当する。また、入山してきていた周囲のクライマーたちにセクション2のサポートを依頼する。

☆街からは、セクション2を指揮するためのオペレーションチームが数名、氷河から街までの運搬(以下、セクション3)を担当する十名弱が入山し、待機。彼らは基本的に、エル・チャルテン在住のガイドと国立公園事務所のクライミングレンジャーで構成されている。

15:30 私とガイド四名は、近くのニポニーノキャンプに行き、周囲のクライマーに声をかけて不足している食料の提供依頼。

16:30 ベースとするポラコキャンプに到着。

17:30 セクション2の偵察のために、私を含めた五名でルート取り付きまで登る。登行中、上部からカナダ人二人組が下山してくる。そこで、私が下山中最初に会ったアメリカ人二人組(ジム、ジェイソン)が、私と別れた後に彼ら独自の判断で、佐藤の救助のためにアングロアメリカルートを登って行ったことを知る。渡りに船、ジムはヨセミテのサーチ&レスキュー、ジェイソンは病院で看護師として仕事をしているという。最終的に彼らが佐藤、増本夫妻に合流したのは21時40分であった。なお、彼らの合流後は看護師であるジェイソンの指示で鎮痛剤の投与を必要に応じて行なった。鎮痛剤の投与後は、佐藤の意識も少しずつ回復してきた。

22:00 偵察を終えてポラコキャンプに戻ると、翌日のセクション2のオペレーションチームが上山していた。

23:00 就寝



2月3日 無風快晴

6:30 アメリカ人二人組（マックス、ウェイド）がアングロアメリカルート登攀のためにポラコキャンプを出発。

9:00 セクション1の搬送作業を、増本亮の指揮のもと四名で開始。佐藤が寝袋に入った状態で、最初の緩傾斜帯の1ピッチをローワードアウンで降ろす（図5）。四名をもってしてもハーネスの装着が困難だったため、

寝袋に支点を取り、それごと吊り降ろす形となった。万が一のことが無いように、二名で介助しながら行なった。

1ピッチ降りた小さな平坦地でシステムの再構築。ここで佐藤にハーネスを装着させることができた。寝袋とツェルトを使って梱包する。

二名が介助する形でさらに1ピッチローワードアウン。ここで下から登ってきた二名と合流し、以降六名での行動となる。この時点で14時。コルまでの水平移動は、フィックスロープを張ってビレイを取りながら五名で両サイドを持って移動（図6）。

セクション2担当のチームは、午前中サポートをしてくれるメンバー集めと情報収集に費やす。14時過ぎ、総勢10名弱でルート取り付きに向けて登行開始。登行中は、下降のラインを検討しながら進む。



図5：稜線上のローワードアウン。



図6：コルまでのトラバース。

15:30 セクション1のチームは岩壁部分の下降を開始。ここからの搬送の流れは以下の通り。

☆一名が先行して次の支点構築とロープのフィックス。

☆上部の支点から一名が増本と佐藤をローワードアウンで下降させる（図7）。ロープはラビットノットを用いて二名を連結させ、増本が佐藤を抱きかかえるような体勢で。増本は状況に応じて佐藤との意思疎通や水分補給などを行なう。



図7：岩壁の下降。バンザイ状態で抱えられているのが要救助者の佐藤。

☆他の一名が、上記二名の下降に合わせてフィックスロープを懸垂下降して彼らをサポート。

☆残りの三名は荷物とフィックスロープの回収。

上記の方法で壁の基部まで下降を続けた。

19:00 セクション2のチームはルート取り付きに到着。プラットフォームとアンカーの作成をしてセクション1のチームを待つ。

20:30 セクション1の搬送を終え、壁の取り付きに降り立つ。セクション2のチームとの情報交換。（図8）

21:30 セクション2の搬送作業開始。

ここからの搬送の流れは以下の通り。

☆佐藤はストレッチャーに乗せられ、それを常時二名が前後に分かれて肩に担いで搬送する。ストレッチャーはロープに繋がれており、そのロープを事前に構築したアンカーからローワードアウンして降ろす。

### 3. 海外登山記録



図8：★が事故現場。セクション1は矢印から雪渓まで。そこからセクション2の下降が始まる。

この二名もまたロープで連結されており、最悪の事態に備える。

☆効率的な搬送のために、常に先行チームが次のアンカー構築を行なう。

☆傾斜の緩いセクションでは左右合計四名がサポー



図9：左下方にアンカー作成の先行チームがいる。

トにつき、合計六名で搬送する（図9）。ただし、安定して歩けるセクションは全体の一割にも満たなかった。

☆傾斜の強い場所、危険な場所では、前後の二名のみでの搬送となる。この場合、下降は「降りやすいところ」ではなく、「鉛直方向に一直線」となる。つまり、クライマーズトレイルのある右岸ではなく、基本的に雪渓のある谷底をまっすぐ降りる。途中、高差50メートル近い滝をローワダウンで降りる場面にも何度か遭遇した。

☆他のサポートメンバーは、荷物を分担して運ぶ。アンカーでピッチを切るタイミングで、ストレッチャーを運ぶ人間を適宜交代する。滝などの危険なセクションでは、サポートのメンバーは右岸のクライマーズトレイルを歩いて下に回り込んで合流する。

以上の搬送を休憩無しの夜通しで行ない、朝を迎えた。私はセクション2の搬送開始から常時ストレッチャーの後方（要救助者の頭側）を担いで佐藤との意思疎通を図っていたが、徐々に彼の反応は良好になっていった。明け方、尿意を再び催した時には、周囲の制止を振りきって自らストレッチャーを下り、自力で小用を足せるまでに回復していた。とはいえ、まともな会話は一切出来ない状況であった。

7:45 ポラコキャンプのすぐ上でセクション3担当の十名と合流し、搬送を交代する。

8:30 ポラコキャンプに到着。ここで、セクション1とセクション2の搬送に携わったチームは解散となる。

9:00 休憩の後、セクション3のチーム、ならびに横山と増本夫妻が氷河に向けて搬送開始（図10）。

フィッツロイ山群ではヘリコプターによる救助は無いとの話であったが、数日前のフィッツロイにおける遭難事故の行方不明者を空から捜索するために、国境警備隊のヘリコプターが周辺を飛んでいた。事前に国立公園事務所のレンジャーが彼らに救助要請





図10：氷河上の搬送。

をしてくれたおかげで、氷河上でのピックアップとなった。

11:30 ニポニーノキャンプから4kmほど下った氷河の平坦地でヘリコプターと合流。ピックアップされる。なお、収容人数の関係上ヘリコプターには佐藤一人が乗ることになった。ヘリコプターはカラファテの病院に直行。ここでセクション3の搬送に携わってくれたメンバーと別れ、横山と増本夫妻は再びポラコキャンプに向けて戻る。

14:00 ポラコキャンプに到着、装備の撤収。

16:00 ポラコキャンプを出発。

23:20 エル・チャルテンに到着。

以上が救助活動の顛末である。以下、救助活動全体を通して感じたこと、特記事項を箇条書きで記す。

☆フィッツロイ山群ではヘリコプターによる救助は実質的に不可能である。ゆえに、救助活動は人力となる。ただ、導入を検討するという話もある。

☆好天周期であったことが何よりの救いであった。私自身が単身山を下りることができたのも、総勢30名以上のサポートを得ることができたのも、天気が良かったからに他ならない。例えば事故がもう一日早く別の場所で起こっていたらと考えると、同じような結果にはならなかったかもしれない。

☆山を降りて最初に出会ったのが、私たちが良く知

る増本夫妻であったこと。次に出会ったのがヨセミテのレスキューチームと看護師という願ってもない組み合わせであったこと。そして氷河に降り立って早い段階でこの地をよく知るガイドの四名に出会ったこと。これらの幸運が重なったのも大きい。

☆岩壁での下降方法に関しては、基本的には要救助者を背負って行なうというのがセオリーであると思うのだが、佐藤自身が何もできない状態であったことを考慮すれば、今回の方法は六人を効率良く使った最善の救助だったと感じている。増本が最善の策を講じ、それに他の五人がチームとして動いたおかげである。

☆セクション2の下降に関しては、当初は少々戸惑いがあった。ストレッチャーと一緒に岩壁をまっすぐ下るというアイデアには目がテンであった。しかし実際に行なってみると、非常に効率の良い方法であったと感じる。そもそも何人がかりでストレッチャーを運ぶにしても、足元は不安定な岩屑の斜面、一人であってもダウンクライミングしなければならない場所も多く、まともに複数人間がストレッチャーを安定して運べる場所ではなかった。

☆現地のガイドは、シーズンの度にこのような救助活動を行なっているようだ。正直なところ、アルゼンチンのガイドにそれほどの信頼を置いていたわけではなかったが、実際に一緒に行動してみて初めて、彼らの体力と技術の確かさに驚かされた。後から知った話だが、今回はフィッツロイ山群の稜線上から生還した、過去最大級の救助活動だったようだ。事故現場からヘリコプターによるピックアップ現場までの標高差は1500メートル、そのうちの九割以上は岩壁もしくは傾斜の強いガリーであった。

☆今回、国境警備隊のヘリコプターによって氷河上でのピックアップが行われたのは幸運以外の何物でもない。さもなくば、多くの人の力を借りてプラス

### 3. 海外登山記録

15キロの距離を歩かなければならず、時間も労力も、そして佐藤の容態自体にも悪影響が出る恐れがあった。このヘリコプター救助にかかった費用はゼロであった。なお、このヘリコプターは氷河上における要救助者のピックアップは可能であるが、稜線上などでホバーリングしながらピックアップする能力は持ち合わせていない。

☆私自身の行動に関しては、早朝山を降りて救助要請に向かったのは結果的に正解だったと思っているが、もう少し現地の救助の実態を正確に把握しておくべきだったと反省している。また、切羽詰まったとき、心の中で期待することばかりに頭の中が囚われてしまって、現実的な判断を鈍らせてしまうという経験もした。とりわけ、ヘリコプターによる救助への期待を引きずってしまったことが悔やまれる。実は、多大な貢献をしてくれた増本夫妻もまたヘリコプターが頭の中にあり、いつしか、私との会話の中で「ヘリコプターによる救助」がコンセンサスとなってしまった。その考えが、救助を遅らせてしまった一因であることは否めない。事故が起きた時こそ冷静に俯瞰的にチームの状況を見据えて行動する必要があり、また、実際に登る地域の最新の情報を入手する必要がある。

☆私たちは軽量化のために通信機器は一切持参しなかった。そもそもパタゴニアには、これまで通信機器を持参したことがない。しかしここでは、通信機器を使って街とのやり取りが可能である。軽量化を叫ぶほど大きな代物でもない。それがあからと言って事故が無くなるわけでも死を免れられるわけでもないが、より効率的な救助のため、周囲を混乱に巻き込まないためにも、最低でもテキストを打てるくらいのデバイスは持参すべきだろう。

☆佐藤と私は、かれこれ十五年以上登攀を共にしてきた仲であり、海外の大きな山での成功も経験して

いる。また、今回のパタゴニアを前にしてハードなトレーニングを一緒にこなしてきた。にもかかわらず、100%の意思疎通が出来ていなかったのだと思われ知らされた事故でもあった。取るべきリスク、排除しなければならないリスクをその状況に応じて取捨選択し、スピーディな行動の中で判断していかなければならない。末端を結ぶのかどうか？バックアップを取るのかどうか？そういう基本的な事柄にも二人の完璧なコンセンサスを得る必要があるし、スピーディに行動している時はなおさら、一息ついてお互いの考えを整理することは大切である。

### 5. 事故後の対応

2月5日 朝から日本とのやり取り。佐藤の家族、私自身の家族、留守本部などへの連絡。昼過ぎに私一人で佐藤の入院するカラファテに向かう。増本夫妻には、エル・チャルテンにある私と佐藤の荷物の整理をお願いする。ローランド・ガリボッティが事前にカラファテの日系人が営む宿と連絡を取り、私の受け入れ体制を整えてくれていた。夕方カラファテに到着すると、ミヤザト・インのホルヘさんが出迎えてくれる。車で病院に直行。

佐藤は集中治療室におり、薬が効いているためか、呼び掛けには反応せず。医師の話によると、佐藤は頭蓋骨右脛周辺の骨折を負い、重症。入院後すぐに頭部に溜まった水を除去する手術を行ない、術後の経過は良好。また、前歯を四本欠損、背骨にも若干の骨折があるとのこと。頭蓋骨内の空気が抜けないう限り、飛行機に乗ることはできない旨を伝えられる。病院を出て、ミヤザト・インにチェックイン。

2月7日 午後、エル・チャルテンに戻る。夕方、街外れの敷地で今回救助に携わってくれたメンバーを呼んでアサード（焼き肉）パーティ。エル・チャルテンでは、救助活動が終わるといつも同様の慰労

会が行われるようで、ガイドを中心としたグループに立案から準備までのすべての取り仕切りをお願いした。実は同時期に別の山でも事故があり、そちらの救助チームとの合同の慰労会であった。救助に携わってくれた皆の温かい言葉には救われた思いがした。

2月8日 エル・チャルテンに残してあった佐藤と私の荷物を増本夫妻の協力でまとめる。夕刻、単身カラファテに戻る。

2月9日 久々に病院に行くと、佐藤の調子はかなり良くなっていた。以降、佐藤は2月26日まで入院生活（一度手術を行なう）。私は日本とのやり取りと病院往復。

2月26日 佐藤退院。以降、ミヤザト・インで生活。佐藤の調子はまずまずで、基本的な日常の生活を自力で行なうことも可能であったため、当初彼の帰国まで一緒に行動するつもりであったのだが、私の個人的な事情もあり、先に帰国することに決める。

3月2日 横山カラファテを離れる。4日帰国。

3月6日 佐藤最後の検査。帰国の許可が下りる。

3月9日 佐藤カラファテを離れる。11日帰国。

帰国後の佐藤は、再度日本の病院で再検査。右目の視力低下、右半身の痺れ等の後遺症状は残るが、あとは原則自力でのリハビリとなった。

以上が事故後の行動概要である。もちろん、現地と国内とのやり取りなど、様々な雑務もたくさんあったが、ここではその詳細には触れない。事故後にかかる費用を抑えるために、また、結果的に命に関わるような怪我にならずに済んだため、日本から佐藤のサポートのために家族などが現地入りするようなことはせず、基本的にパートナーの横山が現地での雑務を行なった。また、増本夫妻は荷物の整理から雑務、様々な伝達役まで、私に寄り添って対応してくれた。ミヤザト・インのホルヘさんエリザベスさ

ん一家には、多大なご協力、助言、ご親切を賜った。彼らがいなければ、事故後のすべての対応が、何から何までもっと煩雑になっていただろう。

☆以下、事故対応のために現地で支払った費用。

・救助費 1,120,000円

（救助に携わった現地ガイドへの謝礼、慰労会費等）

・治療費 1,600,000円

（主に入院費用）

・交通費 450,000円

（二人分の帰国便再購入を含む）

・宿泊費 280,000円

（主にミヤザト・イン。決して安い価格ではないが、それ以上の恩恵に与ることができた。）

・カラファテでの生活費 35,000円

（食費、日用品購入費等）

総額 約3,500,000円

## 6. おわりに

事故が起きた瞬間からの数日間、私の頭の中には、どうして？という戸惑いが渦巻いていた。「不可抗力」。抜けるはずのないロープが手元をすり抜けていった、と。

しかし、それは間違いであると今は思う。冷静になればなるほど、起こるべくして起こった事故にすぎないと気づかされる。とはいえ、「ロープの末端は結びましょう」と声高に叫んで本稿を終えるつもりはない。それは、誰かにこの事故の話をするたびに何度も指摘されてきたことではあるのだが。

私たちをよく知る仲間たち、経験豊富なクライマーたちは、むしろ逆の言葉をかけてくる。「極限を追及するために、そういうリスクを承知の上で受け入れてるんだから。誰も責められないよ」と。確かに、これまでに私たちが行ってきた登攀を思い返せば、よくぞあんなことやったな、と言いたくなるよ



### 3. 海外登山記録

うなりリスク度返しの行動は少なからずある。その時何か起きていたらどうするつもり？と聞かれたら、素直にペコリと頭を下げるしかないのだけど、その一歩を踏み出したからこそ納得の結果を手繰り寄せることができたのもまた事実である。これまでのそういった行動を否定する気持ちにはなれないし、私自身の本心に問いかけた結果、リスクは承知で行動を起こさなければならない場面はこれからも出てくるかもしれない。

ただ、そこに想像力の欠如だけはあってはならない、と思う。「想定外」という言葉が一時期流行った。そう思わざるを得ない場面は様々な状況で生じるかもしれない。今回の事故も、事故当初はまさにそんな思いであった。便利な言葉だ。それは別の見方をすれば、単に想像力が欠如していただけに過ぎないのに。そしてこの部分にこそ、アルパインクライミングで生き残る術が隠されていると思う。ありとあらゆる可能性に思いを巡らせ、もしも少しでも不安要素が残るのであればそれを軽減させる努力をすべきだし、それを怠って事故が起きたのであれば、なにも文句は言えまい。裏を返せば、導き出した結論がそのリスクを受け入れることなのであれば、最後までその行動に責任を持てばよい（判断のアップデートは必要であるが）。

今回、これまで積み上げてきた私自身の山に対しての自信が一瞬のうちに揺らいでしまった。決して悪天でもなく、真っ暗だったわけでもなく、体力的にも問題なく、精神的に追い詰められていたわけでも気が緩んでいたわけでもなかったはずのその瞬間に、まさかこんな安易なミスを起こすなんて。

今は、この自信を取り戻す長い時間の中にいる。そう簡単には抜けられそうもない。あの瞬間の、シュルツというロープの音、フワリと体が軽くなった感覚、何か重いものが地面にぶつかる音、次の瞬間に

パートナーの体がゴムマリのように跳ねながら落ちていく光景。あの恐怖を忘れてしまいたい。でも、忘れてはいけない。それを克服したうえで次の山に向かいたい。

今回の事故に関わったすべての人たちには、感謝以外の言葉が見つからない。日本で煩雑な雑務を引き受け、また私たち家族を支えてくれたクライミング仲間たち、そして私たちの帰国を辛抱強く待ってくれた家族。改めて、周囲を取り巻く人たちに私たちは支えられているのだと気づかされる。また、救助活動に当たった世界中のクライマーたちの無償の友情は尊敬に値する。

最後に、パートナーの佐藤裕介。彼の運の強さ、体の強さ、心の強さ。そのどれかが欠けていても、彼は助からなかったと思う。よく生きていてくれた。それだけである。佐藤がカラファテの病院を退院して数日経ったある日、ホテルの一室で今回の事の顛末をすべて話した。ひとしきり話を聞いた彼は、一言こういった。

「だれの責任でもない、チームとしてのミスだよ」  
こういう男と、これからも山に登りたい。彼の一刻も早い復帰を願うと同時に、いつかまたそう遠くない将来、一緒にフィッツトラバースの再挑戦ができればこの上ない喜びである。